

うれしかった『おい!』の呼びかけ

川内 一 誠

大平さんと初めて親しく話す機会を持ったのは、東海道新幹線の中だった。佐藤内閣末期の昭和四十七年三月、当時大平さんはこれというポストにはついてなく、割合ゆくりした日程で、故郷香川県の選挙区へ向うところだった。宏池会担当になったばかりの私は、この機会に「大平哲学」を勉強させてもらおうとお供に加えてもらった。同行記者は私一人、ほかに次の総選挙を目指して政治家修業中の加藤紘一さんも一緒だった。

車中で、また宇高連絡船の中で実にさまざまな話を聞かせてもらった。笈を負って故郷を出た時の心境。キリスト教に入信し賀川豊彦氏のところへ通いつめた頃のエピソード。大学卒業を控えて郷土の先輩津島寿一氏のところへ就職の相談に行き、結局津島氏の推薦で大蔵省に入ることになった顛末。さらに大蔵省の先輩池田勇人蔵相から秘書官にと口説かれ、再三辞退したにもかかわらず、強引に秘書官にされてしまったいきさつなど、いずれも大平さんの人柄のじみ出た良い話ばかりだった。

話の合間合間に大平さんは、しきりに私の名前を呼ぶ。「隣に座って話を聞いているのは一人だけなのに」と思ったが、ほどなくそのわけがわかった。

「人間誰でも、他人に自分の存在を認めてもらうのは嬉しいものなんだ。相手の存在を認める第一歩は、その人の顔と名前を覚えること。だから僕は、その人の名前を覚え込むまで、何度も何度も繰り返し返して名前をいうことにしてるんだよ」といつてにこっと笑った。その後も大平さんから、名を呼ばれる時はほとんど君付けだった。

第三者に紹介される時「さん」を付けられて恐縮したこともあった。言葉遣いは誰に対しても丁寧だった。

そんな大平さんから、ある時「おい、川内」と声をかけられた。衆議院予算委員会室の前の廊下を歩いている時で、その時大平さんは田中内閣の外相だった。「おい」という言い方は、ふだん丁寧な大平さんにそぐわなかったし、名前を呼びすてにされたのも初めてだった。しかし声にはいつもと同じ暖か味があったし、むしろはずんだような感じさえあった。緊張続きの委員会審議から、一息入れに外へ出たところ、たまたま気のおけない相手が通りかかったので、思わず声をかけたという風だった。二言三言とりとめのない話をして、大平さんはまた閣僚席へ戻っていった。

大平さんの葬儀の日、追悼番組の中で元国鉄総裁の磯崎叡さんにインタビューした。磯崎さんは戦時中大平さんが興亜院という役所に向向した時の同僚で、伊東正義、佐々木義武さんら当時の仲間九人で「九賢会」というグループを作っている古くからの友人である。磯崎さんははじめのうち、故人への甲意を表すためだろう「大平さん」と敬称をつけていたが、話に興が乗るにつれて「大平、大平」と呼びすてになった。「僕は大平に何もしてやれなかつたけれど、僕の人生にとって大平というすばらしい友人を持ったことは、本当に幸せだったと思います」磯崎さんはインタビューをこう締めくくった。さり気なく「大平」と呼びすてにしたところが、大平さんとの距離の近さ、友情の深さを感じさせたし、話の内容も情味あふれるものだった。

磯崎さんの話を聞きながら、大平さんから「おい」と声をかけられた日のことを思い出していた。『敬称略』はその後も何度かあった。「九賢会」の方々には及ぶべくもないが、たとえ二度か三度であっても、呼びすてにできるような身近な存在として扱われたのだ。大平さんという豊かな心を持った人にめぐりあい、多くのものを吸収できたことは本当に幸せなことだった。